

講座 日本現代詩史

―― 戦前・戦中・戦後 ――

講座 現代詩史 日本

4

昭和後期

村野四郎
関良一
長谷川泉
原谷子朗
編

右文書院

編 者 紹 介

村野四郎（むらの・しろう）

明治三四年一〇月東京都生まれ。慶
応義塾大学経済学部卒。東京教育大
学講師。現住所・東京都文京区千石
2-13 〒112

関 良一（せき・りょういち）

大正六年一二月東京都生まれ。東京
文理科大学国文科卒。専修大学教
授。現住所・東京都練馬区大泉学園
町2624 〒177

長谷川泉（はせがわ・いずみ）

大正七年二月千葉県生まれ。東京大
学国文学科卒。学習院大学講師。現
住所・東京都文京区西片1-1-11 〒
113

原 子朗（はら・しろう）

大正一三年二月長崎県生まれ。早稲
田大学文学部卒。立正女子大学教授
現住所・東京都練馬区練馬2-31-2
〒176

講座・日本現代詩史（全4巻）

第四巻 昭和後期

昭和48年11月25日 印 刷

昭和48年11月30日 発 行

編 著 者

村 野 四 郎

関 良 一

長 谷 川 泉

原 子 朗

発 行 者

三 武 達

発 行 所

右 文 書 院

〒
101

東京都千代田区神田小川町 3-24
振替東京109838／電話03(292)0460

★落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

臺灣印刷・三恵印刷・加藤製函・大和工業所

（分）0392-（製）731110-（出）8614

は し が き

詩は、精神のたたずまいにおいては、すべてに、もつとも嚴格でなければ成立しない。それは、ただに、外面的規矩の問題ではなく、内面的な精神構造において、そうでなければならぬ。

その意味からすれば、詩人の思想と神経は、他の文学ジャンルの担い手に先んじて、強靱であり、かつ予言者のでもなければならぬ。その洞察は、時代におくれをとるのは論外であり、常に時代に先行しなければならぬであらう。それが、詩に課せられた宿命であり、かつ詩人にとっての榮光である。

本書は、日本の近代詩史において、詩人がはたし、その結果、創作された詩が、どのような位置を占めてきたかを追求してはいない。その役割は、本講座の別巻がすでにはたしているからである。本書は、その土台の上に展開されている。しかし、本書においても、上述の命題に触れることを余儀なくされ、そしてその説明をおこなっている部分がある。それは、戦争中において、詩人がどのような立場をとり、どのような詩が生み出されたかということに關説する部分である。戦後を論ずるためには、戦時下にも触れざるをえないからである。その記述は、必ずしも厚くはない。しかし、このことの重量は重い。

なぜならば、戦後は、戦時下を前提としての繼起的な發展であるからである。そして、本書の隨所に、日本の戦後の起点が、冷厳な敗戦を座標とせずに、終戦という曖昧な、弥縫的なことばに示されるような姿勢で印せられたことへの痛烈な批判と反省とが述べられている。姿勢は、結果を予見させる。巨視的に見た日本の戦後は、

いまだ、現在の時点でも終結してはいない。いや、この言いかたは正しくないであろう。微視的に見れば見るほど、戦後は、いまだ終了してはいないといったほうがよい。朝鮮事変の一つのくぎりとして、日本の戦後の終結を説く論調が存在したことも事実である。それは、今にして知る、願望をあらわす虚構であった。

詩人は、現実妥協的な政治家や経済人とは違う。ゆえに、現象に幻惑されることなく、常に本質を凝視すべきものである。本講座のなかで、本書が、もっとも、時代と結んだ、日本の命運、そして日本文学の命運について、苦渋に満ちた洞察に満ちているのは、そのためである。それは、日本が当面した戦後の、困難さと、厳しさがそうさせたのである。背骨の上に音たててのしかかる歴史のきしみと、その重量を感得しなければならぬ。このような宿命の苦しさと厳しさは、他の巻にはない。

*

精神の新陳代謝は、歴史の教えるところである。自然科学は、それを進歩の概念で代置する。結核の治療に、大気安静療法を置きかえることは、化学療法や外科療法が、治療法を一変した後においては、時代錯誤のたわ言にすぎない。だが、芸術の世界は、進歩の概念をもって歴史を構成することのできない世界である。人間主体の変革によって、創作する主体も、享受する主体も変えられたことは事実である。ゆえに、詩に執すれば、戦後の意識構造の変革によって、詩はたしかに大きく変えられたのであり、その結果、詩はたしかに大きく変わったのである。だが、それを進歩の概念で律することができないのは、上述のとおりである。進歩の評価を基準にする限りにおいて、評価の結果は、明白である。しかしながら、進歩の評価を没却することによって、評価の結果

は、必ずしも明確ではない。敗戦という、かつてない転形期を体験した日本の生きかたと、そこに創造され享受された作品の評価は、一義的に分明ではないことは、さらにはつきりしている。

精神の新陳代謝が歴史の宿命だとして、そこに未曾有の転形期がからみつき粘着することによって、戦後詩は若年性を誇示すべきであった。だが、戦後文学の花ざかりが、三派鼎立ということばをもってすれば、一つの鼎に既成の旧作家の存在が大きかったのと同様に、詩の世界においても、一つの鼎が既成の詩人によって大きく、どっかりと坐りよく位置されたとすれば、それはどういうことになるのであろうか。そのことは、詩という本来の表現技法の持つ磐石の強みを誇示されるものであるか、あるいは、戦時下における詩人の芸術的抵抗が、戦後の精神風土にそのまま延長できるような卓越したものでなければならなかったかのいずれかであらう。本書は、その命題に対する具体的な解答を用意している。

戦時中から、戦後にかけて実存の世紀になった。哲学でいえば、そのようになる。しかし、人間の思想を哲学にまで体系化しなくても、自然科学の異常な進歩（この場合は「進歩」である）に拮抗する社会科学の進展は、おくれたといっているように思う。そのことが、戦後の人間類型を複雑なものにしている。哲学者でなくても、本質的に予言者である詩人は、現象だけをうたうのではなく、ものを思わざるをえない。それは、もちろん、哲学でもなく、あるいは思想というほどの重量を持たないにしても、そのような思想化の傾向を無視することはできない。本書の随所に、そのような実践の傾向を読みとることが可能であらう。

そのことは詩想と結んで、詩材の拡大につながる。物象的な現象と観念との境域の大きな裂口が埋められてきていることを示すものである。

芸術的近代派は、第一次大戦後の前衛芸術の盛況と密着して迎えられた。第二次大戦後の表現様式は、第一次大戦後のそれほどの、歴史の変革を企てる余地はなかった。それほどまでに、第一次大戦後の前衛芸術の運命の成果が大きかったことにもなる。しかし、詩が様式を重んじ、様式を通して享受されるものである限り、表現様式の模索は、転形期の大きな課題である。その意義は過少評価することができない。本書は、その点の目くばりにおいても益するところが多いであろう。かつて「様々なる意匠」が説かれたことがあるが、様式だけに限定しても、戦後の詩は分析と追求にたえるものを持っているのである。

マチネ・ポエティクも、そして「純粹詩」も「荒地」「地球」「列島」も、そして「權」「貌」「氾」「今日」も、戦後詩の万華鏡のような様々な模索が追求されている。そして、再びくりかえせば、詩人の目は未来を向っており、多分に予言者であるだけに、そこから我々が学びとるものは多くなければならないのである。

昭和四十八年九月

長谷川 泉

はしがき

第一講 戦後・文学・詩

長谷川 泉

1	戦後と精神的被占領	三
2	戦後文学と詩	一〇
3	戦後の詩精神	一六

第二講 戦後詩の出発とその背景

唐川 富夫

1	敗戦と戦後文学	一七
2	戦後詩壇の動向	二〇
3	詩人の抵抗と戦後詩誌	二五
4	「純粹詩」の初期	三三
5	「純粹詩」の中期	四七
6	「純粹詩」の後期	五〇

第三講 「荒地」・その世代と詩精神

杉 本 春 生

- 1 戦時下の「荒地」——その周辺……………七
- 2 戦時下の『マチネ・ポエティク』をめぐる……………七
- 3 「荒地」の展開と戦後文学……………九
- 4 「荒地」の変貌と解体……………七

第四講 文学としての前衛派の位相

馬 渡 憲 三 郎

- 1 戦後詩とはなにか……………一〇
- 2 前衛詩発生の社会的背景……………一〇
- 3 「列島」と前衛派の詩人たち……………一六
- 4 むすび……………一八

第五講 戦後の抒情詩

小 川 和 佑

- 1 戦後の意味……………一三

2	抒情の復活	一五
3	丸山薫と『北国』および戦後の伊東静雄	一六
4	新しき抒情	一七
5	野村英夫と秋谷豊	一八
6	新浪漫派の運動	一九
7	鎮魂曲の世界	二〇
8	『花の木の椅子』と『村のアルバム』	二一
9	安西均の詩業	二二
10	戦後の抒情詩概観	二三

第六講

「マチネ・ポエティック」論

大野 純

1	はじめに	二七
2	マチネ・ポエティックの運動と作品	二八
3	当時の反響―批判とその実状	二九
4	グループの文学的性格	三〇

5	マチネ・ポエティクの是と非	三六
---	---------------	----

第七講 現代詩の文学的達成 土橋治重

1	はじめに	三五
2	西脇順三郎・その永遠の青春	三六
3	金子光晴・その強烈な個人主義	三三
4	三好達治・あまりにも重すぎた過去	三六
5	村野四郎・その蒼白なる実在	三四
6	高見順・生と死との発見	三七

第八講 新しき青春の開花 明珍昇

1	第二次戦後派の登場	二五
2	人間疎外の克服へ	二七
3	ことばの美学への試み	二八

第九講 戦後の女流詩人素描

安西 均

- 1 深尾須磨子―その1 二九五
- 2 深尾須磨子―その2 三〇五
- 3 高田敏子 三一
- 4 江間章子・中村千尾・三井ふたばこ・新川和江 三五
- 5 白石かず子 三〇

第十講 戦後詩と新しい海外詩

星野 徹

- 1 第一次戦後派とヒューム、エリオット、オーデンまたアラゴン 三五
- 2 第二次戦後派とプレヴェール、シュペルヴィエル 三五
- 3 第二次戦後派以後 三六

第十一講 新しい世代の詩精神

嶋岡 晨

- 1 〈断絶〉の世代 三六

2	〈不可能性〉詩論の継承……………	三七五
3	〈作品行為〉とモラルの欠落……………	三八〇
4	〈全体性〉への希望……………	三八五

第十二講 戦後詩論史

阿部 正路

1	その出発点……………	三九五
2	『詩論』の基底……………	三九七
3	第四の革命……………	三九九
4	「荒地」の出現……………	四〇九
5	「列島」を超えて……………	四一四
6	戦後三十年の文学史へ……………	四一八

付録

昭和後期詩誌解題

唐川 富夫 編

日本現代詩史年表

小川 和佑 編

第一講 戦後・文学・詩

長谷川
泉

1 戦後と精神的被占領

アメリカが噓をすれば日本が風邪をひくといわれたのは、ただに底の浅い戦後の日本の経済を揶揄したもの
即断してはいけない。ことは、もっと基本的な精神構造にかかわる問題である。GNP世界第二位と誇示する前
に、戦後はほんとうに終わったのか、厳粛に反省する必要がある。

第二次大戦後の西欧において、私は瓦礫の巷を見た。一九五五年の西欧への最初の旅において、私はベルリン
のブランデンブルク門に近く、焼けただれた煉瓦の堆積した廢墟の街を見た。人影の少ないベルリンの大通りに
ペンペン草の生えている光景を脳髓の奥に焼きつけた。ミュンヘンも破壊の跡が甚しかった。静かな文化的都市
であるスツットガルトにおいてさえ、建物の破壊の遺残が、そのまま市民の活動を支えていた。戦勝国のロンドン
においても、フランスのパリにおいても、戦禍の爪跡は、なお凄絶であった。そして、戦敗国のドイツは屍の街か
ら立ち上がって、戦勝国を追い抜いていた。形の上では、ドイツにおける戦後はまだ現在においても続いている
と思う。一九五五年の強烈な印象のその後における西欧の旅でも、そして最近では一九七〇年における確認で
も、そのことをあえて否定はしない。だが、ドイツにおける精神の戦後は、すでに克服されていることを感ず
る。その気持は、一九五五年において、瓦礫の巷を眼前にした時にも、感じ取ることができたものであった。

日本の歴史は、隔絶された島国の地理的環境による特殊性によって、一種の国際的過保護の状態にあった。

長い鎖国が、その国際的過保護をさらに支えた。西欧近代の浸潤によって、国際的過保護は冷厳な現実の風霜にその外衣をはぎ取られた。長い鎖国の反動は、急速な富国強兵策をとらなければならなかった悲劇を生んだ。弱肉強食の国際競争に処して身の保全をはかるための運命が太平洋戦争の悲運をもたらした。しかし、その途は日本の主体性において選択されたものであった。外圧に拮抗する条件下に、選択された途が、民族の歴史において、どのような収支決算書を提出するかは、近視眼的な結論を拒否する。太平洋戦争の敗戦は冷厳な事実であるが、一つ一つの戦争なるものに戦争を肯定する論理があるとすれば、民族の運命がかけられた戦争が、歴史の年輪の厚みの中で裁断されてゆくには、まだあまりにも生々しすぎる。振子は、一方の極において停止してしまつてはならない。民族や国家を認めない立場からの論議ならば話は別である。そのようなユートピアはまだ実現してはいない。以上は、ナショナリズムに傾斜した論議ではない。

戦後とは、本質的に何であるか。それは当然戦争を前提とする。日本においては、もちろん敗戦を前提とする。終戦ではない。日本においては、敗戦を前提とした戦争そのものの処理が、戦争を遂行した国家にとっての運命である。戦後とは、巨視的にはその処理期間である。戦争による傷痕は、戦勝国にあつても、戦敗国にあつても、軽重の別はあつても、当然あり得るし、現実にあつた。近代戦においては、あるいは戦勝、戦敗の概念の変革をすらもたすかもしれない。そして、そのことが戦争の絶滅への方向を志向させるかもしれない。だが、ユートピア論議は、現在の現実ではない。現在は、巨視的には第二次大戦後の、戦後ではあつても、現実に世界のそちこちに戦火がくすぶっている。現実に、武力をもつての人間の殺傷が行なわれている。